

がん専門医に聞く

富山労災病院 外科医師

むねもと まさよし
宗本 将義



H28年 移転予定(新病院イメージ)

－ 大腸がんについて (1) －



大腸は、消化吸収された残りの腸内容物を貯留し、水分を吸収しながら大便にするところです。大腸は盲腸より始まり、上（頭側）に向かう部分が上行結腸、次いで横に向かう部分を横行結腸、下に向かう部分が下行結腸、S字状に曲がっている部分がS状結腸、その後直腸となり肛門へ至ります。大腸がんはこのすべての部分にできる可能性があります。特にS状結腸、直腸によく発生します。

大腸がんは、早期であればほぼ100%近く完治しますが、一般的には本当の早期には自覚症状はありません。従って、無症状の時期に発見することが重要となります。大腸がんを早期に発見するためには大便の潜血反応がよく知られています。これは、食事制限なく簡単に受けることができ、便を提出すれば検査はできます。人によってはがんドック検診のPET（ペット）を受け、大腸の病変を発見されることもあります。

では大腸がんが成長していくとどのような症状が出てくるのでしょうか？

がんができる部位によって症状は異なりますが、血便、下血、便秘、下痢の繰り返し、便が細くなったり、おなかの張りを訴える人もいます。また、体重減少や貧血によるふらつきを訴えることもあります。これらの症状がありましたら、早期に消化器科を受診していただくと早期発見につながります。まず、症状があれば大腸カメラにより病変を検索します。

大腸がんと診断されたら、その後は全身の検査を行い転移の有無、手術の術式などを決定いたします。手術は早期であれば腹腔鏡で手術を行い、手術の創も小さく、痛みも少なくなります。また、ある程度の進行がんであっても、部位によっては腹腔鏡で手術を行います。大腸がんの中でも特に肛門に近い直腸にできたものは、人工肛門が必要になる可能性もあります。また、直腸より遠い場所にあってもがんによる狭窄が高度である場合も人工肛門を考慮します。

いずれにせよ、早期発見のためには症状があればもちろんですが、症状がなくても便の検査を受けることをお勧めいたします。